

書評

野間秀樹編著

『韓国語教育論講座 第1巻』

(くろしお出版 二〇〇七年四月)

本稿の筆者は、七〇年代から今日まで、多少とも朝鮮語と関わってきたが、九〇年代以降の朝鮮語学習の高まりには、目覚ましいものがある(筆者の勤務校でも教養教育の韓国語履修者は、このところ五〇〇人を越え、フランス語を優に抜いている)。同時に、日本におけるこの間の朝鮮語研究、とくに共時的研究の深化と拡大はいうまでもない。本『講座』は、このような背景のもとに編まれたもので、完結の暁には全4巻となるという。文字どおり画期的な著作である。『教育論講座』と銘打っているものの、韓国語教育のみならず、韓国語学の総合的講座でもあり、さらに文化教育論も視野に入れ、研究への入門の役割を果たすことを企図している(はじめに)。今回ここで紹介するのは、その第1巻で、総論、

野間秀樹編著『韓国語教育論講座 第1巻』(辻)

辻 星 児

教育史、方言、音論、表記論、語彙論、辞書論、造語論などの分野を含む七二七頁の大著である。編著者の野間秀樹氏(東京外国語大学大学院教授)は、いうまでもなく、現在、朝鮮語学、朝鮮語教育をリードするすぐれた研究者、教育者である。まことに時宜を得た編著者というべきであろう。執筆者は、第1巻だけで二〇名、全巻を通すと六五名を超え、しかも、(筆者の次の世代の)若い研究者を中心としているという。これだけの若い世代の研究者が育ち、活躍しているのを見ると、これからの日本における朝鮮語学、朝鮮語教育に明るい展望を期待することができる。

第1巻を通読して、多くの論考で編著者の目配りが行きとどいていることが分かる。そして、どの論考も、記述言語学

という立場に依拠しており、確実な言語事実や明確な術語にもとづき、基本をおさえていこうという態度が見られる。さらに朝鮮語(学)の枠にとられない広い視野をもっていることなど、全体的に安心して読み進めることができる著書である。とくに、多くの論考で日本語との対照的観点を取り入れていることも、本『講座』の優れた特徴となっている。筆者も、本書を読んで、この対照的観点に教えられた部分が、多々あり、有益であった。また、固有名へのふりがな、年代、脚注など、細かな配慮がなされている部分もあり、好感がもてる。

本『講座』の読者は、韓国語教育・語学に関係する人々、韓国語学習者、言語教育・言語学に関心を持つ人々など、広い範囲の人々を想定している(「はじめに」)。上記のように広い視点に立った本書の内容は、多様な読者を満足させてくれるであろう。また、各レベル(音声学、音韻論、形態音韻論など)の概説も用意され、朝鮮言語学を体系的に学ぼうとする人々に対する導人の役割を果たしている。全体的にみて、バランスが取れ、目配りのきいた良い入門兼専門書といえるだろう。ただし、執筆者によって専門用語の違い(例えば、冠形格と属格など)があり、その説明や調整がほしいところもある。また、論考間の相互参照の注記(記述の重複も含めて)も全体的に施されてあればよかったと思うし、さら

に欲を言えば、巻末に簡単な glossary を付すことができれば初学者には便利であったと思う。

以下、順を追って、本書の内容を紹介していくが、第1巻だけで二九の論考を収めており、全てについてコメントすることは差し控えたい。

「試論：ことばを学ぶことの根拠はどこにあるのか」

野間秀樹

冒頭におかれた編著者の総論である。近代日本における朝鮮語教育・研究の歴史からはじまり、「書かれたことば」にひそむ「翻訳」という営み、「話されたことば」と「書かれたことば」との根本的な違い、ことばを人間の根源的なあり方として捉える視点などユニークな論が展開されている。言語研究・教育がともすれば過度に形式化、技術化し、心や人間の本質から離れていく昨今、本「試論」のように、ことばやその営みの根源性に思いをいたすことは、「ことば」を生業とする人々にとって大切なことであると思う。

以上の総論のあと、朝鮮語教育の現在とその歴史に関する論考が四編続く。

「日本における韓国語教育の現在」 小栗章

「日本における韓国語教育の歴史」 野間秀樹・中島仁

「韓国における韓国語教育の現在」 関賢植

「國際韓國語教育学会の現在」 趙恒録

それぞれ、こまかなデータや数値により朝鮮語教育（学習者数、機関数など）の推移や現状が分かり、有益である。筆者が朝鮮語を学びはじめた一九七〇年ころとは隔世の感がある（七〇年頃朝鮮語の授業があった大学は全国で数校ないし一〇校足らずであったが、（本書によれば）〇三年度は三三五校にのぼるといふ）。なお本論ではふれていないが、戦前、東京帝国大学や京都帝国大学では言語学の講座で朝鮮語の授業があった。

ついで、次の二編は、教師が朝鮮語母語話者か日本語母語話者かによる教え方の違いを扱っている。

「朝鮮語母語話者による朝鮮語教育」 油谷幸利

「日本語母語話者が教えるために」 長谷川由起子

朝鮮語母語話者、日本語母語話者いずれも、強みと弱みがあることは各自肝に銘ずべきことである。上の二論考では、この要点がうまくまとめられている。なお、中級以上の作文の授業等では、同一授業を朝鮮語母語話者の教員と日本語母語話者両者の教員の二人が協力しながら進めることも効果があらう。

教師の問題とともに、朝鮮語そのものの変異も重要である。次の三編は地域的な方言の問題を扱っている。

「韓国と北朝鮮の言語差」 鄭稀元

野間秀樹編著『韓國語教育論講座 第1巻』（上）

「方言の文法的分化」 高東昊

「慶尚道方言とソウル方言」 趙義成

南北での語彙の違い、方言間の差異が簡潔にまとめられて、有益である。ただし、慶尚道方言以外の音声音韻についての概説もほしいところである。

続く五編は、朝鮮語の構造をレベル別に解説した論考である。

「音声学からの接近」 野間秀樹

「音韻論からの接近」 野間秀樹

「形態音韻論からの接近」 野間秀樹

「音響音声学からの接近」 宇都木昭

「韓国語韻律論」 金鍾徳

朝鮮語の音声、音素、音素交替、韻律などについての体系的な記述が試みられている。同時に言語分析とその方法についての入門も兼ねており、（音響）音声学、言語学の方法論も習得できる。とくに、音素、異音、形態素、音素交替といった基本的概念が朝鮮語の例を使って丁寧に説明されている。言語学に疎い読者にも大いに役に立つ。また、日本語との対照にも触れているし、研究の新しい知見もじゅうぶん取り入れられている。

音声・音韻と切り離せない表記論の論考として、次の四編が続く。

「文字と発音の指導法」 趙義成

「韓国語のローマ字表記法」 金珍娥

「ハンブル正書法と標準語」 鄭熙昌

「外来語表記法をめぐって」 中島仁

文字・発音を効果的に指導、学習するための留意点、種々のローマ字表記法の変遷とその比較、現在の正書法の原則、外来語表記法の変遷と実態などが簡潔かつ適切に述べられている。しかも多くが日本語と関連させて論じてあり、さらに日本語母語話者のための効率的な指導法の提言があるなど、指導者・学習者にとって役に立つ。

次に続く五編は、語彙論と主要な品詞を扱った論考である。

「基礎学習語彙論：日本語話者のために」 徐尚揆

「動詞をめぐって」 野間秀樹

「形容詞をめぐって」 中西恭子

「名詞をめぐって」 伊藤英人

「不完全名詞をめぐって」 趙義成

外国語学習にとって基本語彙の選択と提示は非常に重要である。上記の最初の論考では、これまでの基本語彙研究の成果と特性を概観し、選定方法を検討している(本『講座』のどこかに試案基本二〇〇〇語が提示できないであろうか)。朝鮮語の品詞論については、本『講座』の別の巻で論じられる

のであろうが、本書では、主要な品詞である動詞、形容詞、名詞(教詞を含む)および不完全名詞(いわゆる依存名詞、形式名詞)について、その形態、文法的特徴、分類、単語結合、日本語との対照などが具体的に論じられており、それぞれの品詞の性質をつかむことができる。とくに日本語との対照では、日本語学にも寄与する興味深い指摘が多い。

基礎を終えた外国語学習にとって語彙力の向上は中心的課題である。そのためには(上記論考にも言及しているように)原語の小説などを読み通すことは大変重要だと思う。これは語彙力を付け、語の実際の(生きた)使われ方(コロケーションも含めて)が学べるだけでなく、文化や民族の心にふれることができるからである。なお「名詞をめぐって」では、読解能力の向上のためには、朝鮮漢字音の徹底的学習が必要であるとしており、同じ執筆者による次の一試案が章をあらためて示されている。

「漢字音教育法」 伊藤英人

朝鮮漢字音を日本語の読み方に変換する「直し方規則」が示されている。いろいろ問題はあるものの、興味ある試みである。言語史への興味を誘い日本語の理解に役立つものでもあると思う。

語彙にかかわる問題としてコロケーションの問題が次に扱われている。

「韓国語教育におけるコロケーション情報の活用」 南潤珍

コロケーション（連語関係・語と語との共起しやすさ）は意味論ともかわる重要な概念であり、朝鮮語教育にも大いに活用できる分野である。ぜひ深めていってほしい。辞書の記述にコロケーション情報を盛り込むことも今後必要である。

次に続く二編は辞書にかかわる論考である。

「朝鮮語辞典におけるカタカナ発音表記」 熊谷明泰

「同形異語をめぐって」 油谷幸利

最初の論考は既存の四辞書にみられるカタカナ発音表記の現状を分析し考察を加えたものである。なお、アイヌ語のカタカナ表記法はすでに定着しているが、これも参考にしてはどうだろうか。後の論考は、執筆者が構築している朝鮮語Web辞典の紹介である。このWeb辞典に例えば가시다を入力すると即座に六つの分析（異語）が示される。見出し語数は、〇八年一月現在三七〇〇項目を越し、本書執筆時より五倍近く増えている。本稿の筆者も試してみたが、教育に利用できる便利な辞書である。

最後に、語構成の観点からの論考が置かれている。

「造語論からの接近」 北村唯司

朝鮮語の名詞、動詞、形容詞について、派生と合成（複合）の方法を論じたものである。それぞれの造語タイプの概要を知ることができ、有用である。欲を言えば、各接辞の意味についての言及があればありがたかった。

以上、第1巻の内容を簡単に紹介した。種々の理由で表面的な紹介になったことをお許しいただきたい。なお第2巻以降は次のような構成（予定）になっている。

第2巻…文法論、談話論、言語行動論、表現論、社会言語学、言語場論

第3巻…対照言語学、類型論、言語史、教授法、教材論、教材基礎論、シラバス論、評価論

第4巻…文化論、文学・映画・漫画・メディア・飲食論、歴史学、翻訳論、言語存在論、文献案内（二〇〇八年一月刊）

朝鮮語の教育を向上させるには、その基盤となる研究を多方面に深める必要があることはいままでもない。本『講座』は、そのための確実な基礎を提供するものと思われる。全巻の完結を鶴首する次第である。

（岡山大学大学院教授）

朝鮮學報

第二百七輯

平成二十年四月

論 說

- 森 平 雅 彦 高麗における宋使船の寄港地「馬島」の位置をめぐって
——文献と現地の照合による麗宋間航路研究序説——… 1
- 近 藤 剛 嘉祿・安貞期（高麗高宗代）の
日本・高麗交渉について……………49
- 浦 川 登 久 恵 モデル小説・廉想涉《해바라기》の分析……………87
- 池 鳳 花 延辺朝鮮語音借語の語音特徴と
アクセントパターンについて……………(1)
- 金 善 美 現代韓国語と日本語における「o/この+X」の
範疇解釈を導く名詞と述語について……………(39)

書 評

- 野間秀樹編著『韓国語教育論講座 第1巻』：辻 星児……………137

彙 報

- 近着寄贈交換図書目録・会員消息……………143

朝 鮮 学 会

朝鮮学会役員

<p>総裁</p> <p>顧問</p> <p>山田忠一 大久保昭教 植田平秀 青山光教 有井光秀 梅上博孝 大田江森 大谷村益 長田夏 金関良秀 河北内村 齋藤幸正 武村山節 宮田子</p>	<p>参与</p> <p>会長 橋本武人 副会長 藤本幸夫 松尾勇良 幹事長 藤田明良 幹事 * 東潮 * 伊亞 * 岡山善一郎 * 糟谷憲文 ◎ * 岸川隆 * 白川陽 * 鈴木俊 ◎ * 田中明 * 長森美 * 西谷信 * 野間秀樹</p>	<p>* 魯富子 * 波田野節 * 濱田耕 * 廣瀬貞 * 汕谷幸 * 吉田光 * 六反田光 海外編輯委員 鄭張金孝東 光鉉哲</p> <hr style="width: 20%; margin: 10px auto;"/> <p>(事務嘱託) 吉川俊子 *印は常任幹事・ 編輯委員 ◎印は会計監査</p>
---	--	---

朝鮮学報 第207輯

(平成20年度第1号)

平成20年4月10日 印刷

平成20年4月26日 発行

編集 朝鮮学会
代表者 橋本武人

印刷 中村印刷株式会社
京都市南区上鳥羽薬田29

〒632-8510 奈良県天理市柚之内町1050

天理大学内

朝鮮学会

電話 天理(0743)-63-9060

振替 0990-8-10065